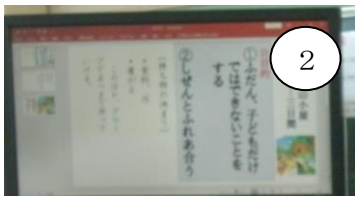
7　授業の実際と考察

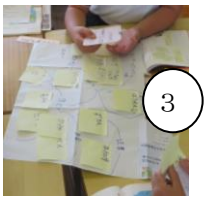
（１）「対話的な学び」に向かうための手立て

１

３年生においては、「目的と条件」に沿って話し合いを進めることを大切にした。前時は、山小屋へ持っていく物を「広げる」話し合いだった。自分が持っていきたい物を伝えるばかりで、友達の意見を聴くことができなかった。本時は、「まとめる」話し合いなので、山小屋への持ち物は、何を目的にし、どんな条件があるのかを全員が理解しておけば、意見をまとめる際に助けとなると考えた。そこで、黒板①と電子黒板②、さらには児童が持ち物をまとめるワークシート③にも目的と条件を記載した。話し合いの際には、子どもたちはそれに立ち戻りながら話し合いを進めていた。また、話し合うことは好きだが、めあてに向かう話し合いに難しさを感じていたので、話し合いで使える吹き出しの言葉カードをグループに１セットずつ渡した。話し合いの際に、カードを手に取り、おしゃべりではなく、まとめる話し合いをしようという意識が高まった。使ってほしい言葉を吹き出しの言葉カードとして持たせたことは、効果的だった。



２



３

４年生は、グループごとに姉と弟が納得するための言葉をロールプレイしながら、グループで考える活動であった。グループで１つのやり取りを考えたので、自ずと話し合う必然性があった。ただ、お互いが納得するという点において、姉と弟の心の声を考えながら言葉を創り出すという活動は想像力を駆使しなければならないところがあり、それぞれの思いに考えを巡らせることに難しさがあった。児童自ら、姉と弟それぞれの状況を今一度確認できる活動を設けたり、３年生のように、吹き出しの言葉カードを用意しておいたりすると対話が活発になったのではないだろうか。

（２）自分の学びを見つめ直す「振り返り」

３年生は、個人の振り返りの前に「まとめる」話し合いをグループごとに振り返った。話し合いのポイントを振り返りのポイントにしたので、児童は振り返りがしやすかったようだ。話し合いのポイントを４つに絞り、また、記号の〇と△のみの振り返りだったので、３年生の児童には分かりやすかった。それを生かして個人の振り返りを行った。前時に話し合いがうまくいかなかったグループは、自分や友達のよさを感じることができなかったが、本時では、目的に沿って話し合えたことや話し合いがまとまったことに喜びを感じている振り返りが多くあった。

４年生は、本単元で学んだことを日常生活に生かせるような振り返りを書かせたいと思っていた。姉と弟のやり取りを自分事として考えるための手立てとして、前時に兄弟、姉妹、または友達同士のトラブルについて発表した。どの子も「よくある」という回答だったので、この学習が日常生活と結びついていることを感じとれていた。本時では、相手の立場になって言葉を使いたいという内容があった。

どちらの学年も振り返りにキーワード、３年生は「まとめる・目的・理由」、４年生は「相手の立場・これから」を提示した。キーワードを使って書けるか書けないかによって、本時のめあてを達成できたのかどうかも児童自身が感じるとることができる。さらに、本校の振り返りは系統性をもたせているので、来年度学年が上がった時にも、自分の学びを見つめ返すことに抵抗が少ないと感じる。学校で系統性のある振り返りの視点があることはとてもよいと感じる。

（３）複式授業について

昨年度行われた複式学級の授業研究にて学んだこと、「同内容の単元を同時にする」ことに挑戦した。本校児童は、友達と話し合うことが好きな児童が多く、本単元ではグループでの話し合いが主な活動となり、児童の主体的な学びが期待できると考えた。予想通り、３年生は導入において、ゴールイメージをもつことができていた。４年生５名は、日常生活に生かせる課題設定にリアリティをもって取り組むことができた。

また、共通性・系統性を考慮して指導方法をそろえることで、教材文は違っても、学習する方法が同じなので、異学年交流の場を作ることができ、学びを深めることができるとのことだった。今回は、４年生の対話の様子を３年生に参観する形で交流の場をもった。さらに、３年生のグループ活動のよさを４年生に見つけてもらうことで、３年生は自分たちの自分たちのよさを実感できたかもしれないと感じた。

複式授業は、児童の主体的な学びを推し進め、さらに自分たちで学習を進めることができたときの充足感も味わうことができる。昨年度の研究授業の講師でもある池上先生は、複式学級のめざすとこは、同時間接指導であるとおっしゃっていた。これからも「主体的」「対話的」「深い学び」をキーワードとした授業改善を、児童と共に模索していきたい。